報道発表

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和５年３月１日

令和４年度（第 73 回）芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞の決定

文化庁では、昭和２５年から毎年度、芸術各分野において、優れた業績を挙げた方、又は新生面を開いた方に対して、芸術選奨文部科学大臣賞、同新人賞を贈っています。この度、本年度の受賞者が別紙のとおり決定いたしました。

１．趣旨

芸術各分野において、優れた業績を挙げた者又はその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞を贈ることによって芸術活動の奨励と振興に資するものです。

２．部門・贈賞

演劇、映画、音楽、舞踊、文学、美術、放送、大衆芸能、芸術振興、評論等、メディア芸術の１１部門にて実施。受賞者には賞状と、大臣賞には３０万円、新人賞には２０万円の賞金が贈られます。

３．贈呈式・祝賀会

３月９日（木）都内ホテルにおいて行います。

４．取材申込について

取材を御希望の報道関係者は、３月７日（火）正午までに別紙取材申込書に必要事項を記載の上、担当（sensho21@mext.go.jp）へ電子メールにてお送りください。
※贈呈式の詳細な時間、場所については事前登録の御連絡を頂いた際にお知らせします。（セキュリティーの都合上、贈呈式の詳細な時間、場所については、式終了後まで公表しないようにお願いします。）

＜担当＞文化庁参事官（芸術文化担当）付
参事官補佐：吉野　千津（内線 2084）
文化創造係：草野　美音（内線 4782）
電話：０３－５２５３－４１１１（代表）
０３－６７３４－４７７６（直通）

令和4年度（第73回）芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞：19名　文部科学大臣新人賞：11名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	尾上（オノエ） 菊之助（キクノスケ）	歌舞伎俳優	「義経千本桜（ヨシツネセンボンザクラ）」ほかの成果
		段田（ダンタ） 安則（ヤスノリ）	俳優	「セールスマンの死」ほかの成果
	新人賞	枝元（エダモト） 萌（モエ）	俳優	「あつい胸さわぎ」ほかの成果
映画	大臣賞	尾上（オノウエ） 克郎（カツロウ）	特撮監督	「シン・ウルトラマン」ほかの成果
		宮本（ミヤモト） まさ江（エ）	衣装デザイナー	「キングダム2 遥かなる大地へ」ほかの成果
	新人賞	早川（ハヤカワ） 千絵（チエ）	映画監督	「PLAN 75」の成果
音楽	大臣賞	児玉（コダマ） 桃（モモ）	ピアニスト	「メシアン・プロジェクト2022」の成果
		山登（ヤマト） 松和（ショウワ）	山田流箏曲演奏家	「山登松和の会」ほかの成果
	新人賞	園田（ソノダ） 隆一郎（リュウイチロウ）	指揮者	「泥棒かささぎ」ほかの成果
舞踊	大臣賞	志田（シダ） 真木（マキ）	琉球舞踊家	「伊野波節（ヌファブシ）」「黒髪」の成果
		福岡（フクオカ） 雄大（ユウダイ）	バレエダンサー	「春の祭典」ほかの成果
	新人賞	田村（タムラ） 一行（イッコウ）	舞踏家	「舞踏 天狗藝術論」の成果
文学	大臣賞	滝口（タキグチ） 悠生（ユウショウ）	小説家	「水平線」の成果
		渡辺（ワタナベ） 松男（マツオ）	歌人	歌集「牧野植物園」の成果
	新人賞	九段（クダン） 理江（リエ）	小説家	「Schoolgirl」の成果
美術	大臣賞	栗林（クリバヤシ） 隆（タカシ）	現代美術家	「元気炉」の成果
		沢村（サワムラ） 澄子（スミコ）	書家	「宮沢賢治（ミヤザワケンジ）–沢村澄子　現象的書展」の成果
	新人賞	中﨑（ナカザキ） 透（トオル）	美術家	個展「中﨑透　フィクション・トラベラー」ほかの成果
放送	大臣賞	藤本（フジモト） 有紀（ユキ）	脚本家	「カムカムエヴリバディ」の成果
	新人賞	佐野（サノ） 亜裕美（アユミ）	ドラマプロデューサー	「エルピス—希望、あるいは災い—」ほかの成果
大衆芸能	大臣賞	二代目 京山（キョウヤマ） 幸枝若（コウシワカ）	浪曲師	「天保水滸伝（テンポウスイコデン）・笹川の花会」ほかの成果
		鈴木（スズキ） 慶一（ケイイチ）	ミュージシャン	「It's the moooonriders」ほかの成果
	新人賞	東京03（トウキョウゼロサン） （飯塚（イイヅカ） 悟志（サトシ）） （角田（カクタ） 晃広（アキヒロ）） （豊本（トヨモト） 明長（アキナガ））	コントグループ	「ヤな覚悟」ほかの成果
芸術振興	大臣賞	唐津（カラツ） 絵理（エリ）	舞台芸術プロデューサー	「愛知県芸術劇場×Dance Base Yokohama パフォーミングアーツ・セレクション2022」の成果
	新人賞	平塚（ヒラツカ） 千穂子（チホコ）	CINEMA Chupki TABATA 代表	映画「こころの通訳者たち」ほかの成果
評論等	大臣賞	岡塚（オカツカ） 章子（アキコ）	東京都江戸東京博物館 都市歴史研究室長	「帝国の写真師　小川一眞（オガワカズマサ）」の成果
		中野（ナカノ） 正昭（マサアキ）	淑徳大学教授	「ローシー・オペラと浅草オペラ」の成果
	新人賞	佐藤（サトウ） 未央子（ミオコ）	法政大学助教	「谷崎潤一郎（タニザキジュンイチロウ）と映画の存在論」の成果
メディア芸術	大臣賞	新海（シンカイ） 誠（マコト）	アニメーション監督	映画「すずめの戸締まり」の成果
	新人賞	野田（ノダ） サトル	漫画家	「ゴールデンカムイ」の成果

※敬称略・部門内50音順

令和4年度（第73回）芸術選奨
文部科学大臣賞　贈賞理由

令和4年度（第73回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	尾上　菊之助	古典、新作の両方で近年の活躍は目覚ましい。令和4年は尾上菊五郎家の芸である舞踊「土蜘」、時代物の大作「盛綱陣屋」の盛綱で優れた演技を見せた。成果が顕著だったのが十月国立劇場の「義経千本桜」。岳父中村吉右衛門に学んだ平知盛、父菊五郎の教えを受けたいがみの権太と佐藤忠信実は源九郎狐という立役（たちやく）の大役三役を的確に演じ分けた。優れた資質に加えて芸への真摯さも備えており、今後への期待は大きく、顕彰するにふさわしい。
演劇	段田　安則	硬軟自在、常に我欲や力みとは無縁の自然体で作品に向き合う。その姿勢は、自ら演出も担った「女の一生」はもとより、従来のリアリズム演出とはかなり異なる「セールスマンの死」においても、揺らぐことがなかった。現実と幻想が混在し、自負と焦燥、愛憐（れん）と激昂（こう）など感情の振り幅も烈（はげ）しい。観客を、そんな崩壊寸前の主人公の脳内を巡る旅へと無理なく導いてみせた。融通無碍（げ）にして、一挙手一投足に説得力が滲（にじ）む名演だった。
映画	尾上　克郎	学生時代の8ミリ自主映画作品出演をきっかけに、美術部はじめ様々な映画制作現場を体験してきた尾上克郎氏のキャリアは40年を超える。矢島信男氏創設の「特撮研究所」に所属以来、先人たちの残した特撮技術と、現代の最先端映像合成技術を駆使し、映画の可能性を拓（ひら）き、豊かに実らせるその技は、「シン・ウルトラマン」でも大いに発揮された。全スタッフが知恵と力をあわせて創り上げる「映画」への敬意と「技術」への挑戦、後進への継承の熱意に打たれる。
映画	宮本　まさ江	時代劇から現代劇まで、その作品に適した寄り添い方で、繊細かつ大胆に世界観の構築に寄与する衣装。それを実現させる手腕が文部科学大臣賞にふさわしいと評価した。 令和4年の対象作品の一つ「キングダム2　遥かなる大地へ」の衣装は、特に複雑な表現力で作品に貢献した。兵士に土地の色の甲冑（ちゅう）（衣装）を着せることで時代の大きなうねりを、主人公の信と一匹狼の剣士・羌瘣に白を纏（まと）わせることで未知数だが世界をけん引する存在に成りうる力を感じさせた。 映画・映像分野の衣装、第一人者にして、時に自ら素材探しから始める作品世界を第一にする姿勢。衣装だからこその表現を創作し続けている。
音楽	児玉　桃	メシアンの音楽を様々な側面から徹底的に学んだ児玉桃氏は、彼の作品を機会あるごとに演奏し、メシアン未亡人であるイヴォンヌ・ロリオにも絶賛された。2022年はそのメシアンの没後30年に当たっており、その節目に「幼子イエスに注ぐ20のまなざし」を始め、メシアンの代表的作品を3日にわたって演奏するメシアン・プロジェクトを展開した。メシアンの作品が自らの身体の一部であるかのように血肉化した説得力に満ちた演奏は、今や世界有数といっても良いほどの完成度の高さを持ち、改めて氏のライフワークとしてのメシアン解釈の比類のなさを印象付けるものとなった。
音楽	山登　松和	江戸時代後期に誕生した山田流箏（そう）曲では、ドラマティックな大曲から江戸っ子の情趣を凝縮した小品まで、硬軟併せ持った表現が求められる。「山登松和の会」は、山登松和氏が追求してきた「素の響きの美しさ」を具現し、山田流箏（そう）曲の多層性に富む魅力を際立たせた。特に組歌「四季曲」の透明感あふれる演奏は心に残る。このほか「根曳の松」の力強く華やかな箏（こと）の響き、小品で示された間の良さと精妙な声の表現も忘れ難い。山田流箏（そう）曲家としての実力と真価を示した年となった。
舞踊	志田　真木	令和4年は、コロナ禍の治まらぬ中での困難な舞台制作だったが、そんな中にあっても目に立った舞台が、セルリアンタワー能楽堂における「琉（りゅう）球舞踊真木の会」で、ことに「伊野波節」「黒髪」は出色の出来だった。「伊野波節」は琉（りゅう）球伝統舞踊の珠玉の名作。女の激しく燃え上がる情念を極めてゆったりした動きに収斂（れん）して心で踊る所作は演者の成長を見せつけ、本條秀太郎作曲・演奏になる「黒髪」は地唄とは違った新境地を表現して成功した。
舞踊	福岡　雄大	福岡雄大氏は、数々の国際コンクールで受賞後、平成21年新国立劇場バレエ団に入団、以後華麗なテクニックと豊かな表現力で古典バレエから近代バレエ、コンテンポラリー作品まで、主演を続け成果を上げてきた。令和4年も古典バレエでの成功のみならず、平山素子、柳本雅寛版「春の祭典」では2台のピアノと男女二人のダンサーという小人数の空間構成で、ストラヴィンスキーの難曲に拮（きっ）抗し、二つの肉体と精神が交差し、人間の根源的かつ壮大な世界観を描ききったことは大いに評価できる。

令和4年度（第73回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
文学	滝口　悠生	第二次世界大戦の激戦地であり、2万人を超える日本軍の戦死者が出た硫黄島は、今では自衛隊の基地が置かれ、民間人の立ち入りはできない。滝口悠生氏の「水平線」は、幻想性と日常性を巧みに綯（な）い交ぜる手法を用いて、その大戦当時と現在、そして島と内地という時空間をつなぎながら、物理的にはアクセス不可能な硫黄島に小説的想像力でアクセスしようとする大胆な試みであり、マジック・リアリズム的で濃密な小説空間を創出した、近年の日本文学における大きな収穫である。
文学	渡辺　松男	「土佐の牧野植物園へ飛ばしたり日差しとなりてわたしのからだ」「閉ぢられてある鏡にて白鳥は漆黒の夜をわたりの途中」など400首を収めた、渡辺松男氏の歌集「牧野植物園」は、生活風景から宇宙の神秘をたぐり寄せる。奔放にして特異な想像力はこの歌集で一段と研ぎ澄まされ、生命世界への先進的な視点を創り出すことになった。その文学性と精神性の高さは現代詩歌の一つの極点を示すものであり、芸術選奨の授賞対象にふさわしい。
美術	栗林　隆	栗林隆氏の作品は常に、造形的な完成度は高くセンシティブで、徹底したリサーチと行動力に裏打ちされた思考と社会批評精神の結晶であり続けている。2022年夏にドイツで開催された「ドクメンタ フィフティーン」において、シネマキャラバンと共に発表した「元気炉四号機」は、氏が定期的にリサーチを継続してきた福島第一原発の形を模した体験型スチーム作品だ。人間のエネルギーの根源はあらゆる感情から湧き上がる元気を由来と考え、原発のエネルギーと重ね合わせ、誰もが裸で体感できる作品にした。 本作は、展覧会全体に向けられたネガティブな騒ぎの渦中でも、堂々と「ドクメンタ フィフティーン」の精神を象徴するオアシスであり続け、世界の美術愛好家らに歓迎された。
美術	沢村　澄子	沢村澄子氏は、書の流派に所属することなく、個展を中心として自己の表現を提示し続けている書家である。その作品は、自分にとって切実な言葉をいかに書くかという、言葉と書のせめぎあいの場に成立している。造形性と運動性を交差させ言葉を書きつける表現は、この現代という時代に共鳴しあうステージに到達している。室内空間を出て、展示フィールドを屋外へと広げるなど、その表現の更なる拡張を続けている。切実な思いを吐露する作品群は、後進へも大きな影響を与えることと思う。
放送	藤本　有紀	藤本有紀氏は、これまでも日本の文化や歴史の魅力を豊かに伝えるドラマを多く手掛けてきた。連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」は、1925年から2025年までの100年を母娘孫の三代の主人公の物語で紡（つむ）ぎだし、個人史を日本の物語へと昇華させた大胆な作品である。日々の暮らしと日本の歴史の繋（つな）がり、海外文化や国際社会への眼差し、メディアの変遷史などを重層的に描きだす、その確かな描写と物語の構築を評価したい。
大衆芸能	二代目 京山　幸枝若	師匠で実父の初代京山幸枝若の芸を継承し、「侠客伝」や「名人物語」などのお家芸に磨きをかけて新たな生命を吹き込んだ。とりわけ上方浪曲のホームグラウンド「一心寺門前浪曲寄席」のトリで演じた「天保水滸伝・笹川の花会」と「寛永三馬術・曲垣と度々平」は、愉快、痛快、弾むような名調子で、古き良き浪曲の魅力を令和の観客に存分に伝えた。体調を崩して精彩を欠く時期もあったが、60代後半からの充実ぶりは目覚ましく、今正に「第二の円熟期」を迎えている。
大衆芸能	鈴木　慶一	現存する日本最古のロック・バンド、ムーンライダーズの中心メンバーとして、高橋幸宏氏と組んだTHE BEATNIKSやKERAと組んだNo Lie-Senseなど多彩な音楽ユニットの一員として、プロデューサー／ソングライターとして、更にはCM音楽、映画音楽、ゲーム音楽のクリエイターとして、幅広い分野での活動が内外で高く評価される鈴木慶一氏。1970年頃にプロ音楽家として歩み始めてから半世紀を経た今、時代時代の最先端の感触をいち早くシーンへもたらし続ける彼の功績を改めて評価したい。

令和4年度（第73回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	唐津　絵理	唐津絵理氏は、公共劇場でプロデューサーとして活動を行い、さらに令和2年に民間支援による新しいダンスハウス「Dance Base Yokohama」の立ち上げに参画、これらの連携の成果として令和4年は「愛知県芸術劇場×Dance Base Yokohama パフォーミングアーツ・セレクション2022」の全国ツアーを行い、ダンスの多様性を示し高く評価された。氏は、アーティストの自立的な活動を支援し、可能性を引き出すために、安全安心な制作環境を整えようと活動を始めた。また創客の視点から、舞台芸術の批評眼を持った新たな観客を生み出すことにも力を入れてきた。これらの活動は芸術振興の意味や方法を改めて問い直す契機ともなった。ダンスに止まらない芸術の創造と振興・支援施策のあり方両面に影響を与える重要な取り組みを牽引してきた存在である。
評論等	岡塚　章子	小川一眞は日本近代写真の大立者と言ってよい。千円札に使われた夏目漱石の肖像がその写真館で撮影されたように、米国仕込みの腕を持つ営業写真師だったが、のみならず、国家的な文化財調査や明治天皇の葬儀の撮影を担い、先駆的な構想と幅広い人脈によって多様な印刷・出版事業を展開した。岡塚章子氏は美術館学芸員として小川と出会い、30年余の堅実な調査を通じ、業績の全容を解明した。重要な基礎文献となることは確実で、表現論だけでは捉えがたい写真史の本質を示唆する業績でもある。
評論等	中野　正昭	日本近代のオペラ史を音楽から論じようとすると、演目の軽重や歌唱・演奏の水準ばかりが問題とされがちだ。大正よりも昭和にレベルが上がるというような発展史観ともつながりやすい。しかし、オペラは飽くまで音楽と演劇と舞踊との交点で営まれる興行であり、その時代の観客の感性や欲求と触れ合ってこそ。優れた演劇史家、中野正昭氏は、そこを確実に捕まえている。大正期の東京ならではの唯一無二の文化現象としてのオペラの姿を、新資料も駆使し、特に上演台本を丹念に読み解いて、見事に描き出した。本書には大正の独自の輝きが宿っている。視点と内容の両面で歴史を塗り替える傑出した業績だ。
メディア芸術	新海　誠	「すずめの戸締まり」は、公開されるや否や大ヒットを記録し、正に国民的映画 として広く人々の支持を得た。東日本大震災を扱ったこの作品は、「君の名は。」「天気の子」に続き、新海誠氏の災害を扱った3部作とも呼ばれ、そのスケールの大きさとダイナミックな物語展開により我々を圧倒する。宮崎、愛媛、神戸、東京、そして東北 へと続くロードムービーは、日本の地方の美しさと過ぎ去った時代への慈しみにあふれており、大切な人を取り戻そうとする一人の女子高生の抵抗が、より大自然の大きさと無情さを感じさせる。日本の神話や伝承に基づく世界観を持ち、アニメーションによって「壮大な叙事詩」を描く氏のスタイルは唯一無二のものである。

令和4年度（第73回）芸術選奨
文部科学大臣新人賞　贈賞理由

令和4年度（第73回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	枝元　萌	「あつい胸さわぎ」は、芸大生になった娘とシングルマザーの母の前に二人の男性が現れ、それぞれ胸の高鳴りを覚える中、娘に病気が見つかって、という母娘の物語。枝元萌氏は一人の女性として娘を思う母の愛情を情感豊かに表現。関西弁でつづられた台詞の軽妙なやり取りの中に丁寧に気持ちを落とし込んだ。舞台を和ませる雰囲気。氏自身のキャラクターも魅力的で、物語の貴重なバイプレーヤーとして活躍が期待できる存在である。
映画	早川　千絵	「自助」「自己責任」といった言葉がはびこり、人間を「生産性」の観点から評価して弱者を切り捨てる社会を、早川千絵氏は長編映画監督第1作の「PLAN 75」で静かに、しかし鋭く批判した。75歳になると安楽死を選べる制度「プラン 75」が導入された近未来の日本を舞台に、制度に関わる人々の日常を丹念に描く。セリフで多くを語らず映像で情感を繊細に表現し、社会問題を娯楽作品のなかに織り込んだ力量は、今後の活躍を大いに期待させる。
音楽	園田　隆一郎	園田隆一郎氏は、声楽から音楽全体を構築していくわざを熟知した、イタリア・オペラが本格的に指揮できる数少ない日本の指揮者である。令和4年は大阪・フェスティバルホールにおけるロッシーニ「泥棒かささぎ」及びびわ湖ホールにおけるヴェルディ「ファルスタッフ」という二つの大作を成功に導き、同時に藤沢市民オペラのヴェルディ「ナブッコ」においても見事な演奏を見せた。イタリア・オペラの伝道師としての今後のますますの活躍が期待される。
舞踊	田村　一行	田村一行氏は、大駱駝艦（だいらくだかん）で麿赤兒氏に師事し舞踏家として活動を始めた。振付・演出に早くから挑戦するほか、他ジャンルとの共演、民俗芸能の採集、子供ワークショップなど舞踏の可能性を探求し続けている。令和4年、振付・演出・美術・出演した「舞踏 天狗藝術論」では、これまでの成果を活（い）かした豊かな世界観を、緻密にして大胆な構想と振付によって創り上げた。舞踏だけでなく舞踊界を牽（けん）引する一人となることが期待される。
文学	九段　理江	九段理江氏は「Schoolgirl」で、太宰治の「女生徒」のリメイクを偽装しながら、今もなお踏襲され続けている母と娘の対立という古典的なテーマの換骨奪胎を図った。母と娘の対立は、迷信や無知との戦いでもあり、影響の不安をめぐる感情的軋轢（あつれき）でもあるので、父と息子における思想的対立のように単純には解決できないが、世代間ギャップの紋切り型への批評や微笑を誘う皮肉を織り交ぜ、AIまで登場させ、このテーマの新機軸を打ち出した。
美術	中﨑　透	中﨑透氏は絵画に始まり、自作の看板や陶芸、ことば、映像から既製品の転用に至るまで極めて多角的な視点を作品に落とし込む。契約行為と共に看板を制作展示した当初から、アートの社会性、人との繋（つな）がり、ものが生まれ消え再生する過程を拾い続ける。Nadegata Instant Partyの一員として活動する一方で、令和4年は個人での複数の発表が際立った。地元水戸芸術館の個展では、地域住民から集めたオーラルヒストリーを看板やネオン、過去の日常の断片と共に展示、それらの存在理由と価値の変容を提示した。一地域の個人的物語が、地方都市の画一的既視感を呼び覚ます。彼の捉えどころのない多様性は何より現代美術の特質を表している。
放送	佐野　亜裕美	佐野亜裕美氏はテレビプロデューサーとして、「カルテット」、「大豆田とわ子と三人の元夫」、「17才の帝国」など、既存のスタイルに囚（とら）われない新しいドラマを生み出してきた。「エルピス―希望、あるいは災い―」では脚本家・渡辺あや氏と組んで冤（えん）罪事件を取り上げ、臆することなく権力の腐敗やテレビ報道の在り方にメスを入れた。それを正義の側から一方的に告発するのではなく、心の闇や嘔（おう）吐する身体といった登場人物の弱さの克服とともに描いた点も高く評価された。
大衆芸能	東京03 （飯塚 悟志） （角田 晃広） （豊本 明長）	洗練された脚本と卓越した演技力により、日常に潜むちょっとした違和感を笑いに変えるコントは、演芸と演劇の区別がつかない独自の境地を切り開き、エンターテインメントとしてのコントの存在価値を確かなものにした。令和4年、9都市34公演の全国ツアー「ヤな覚悟」で圧巻の観客動員数を誇るなど、ライブ中心の活動形態を完成させた功績も大きい。絶妙な人間心理を表現する三者三様の存在感は、演者が人生経験を積むほどに魅力を増しており、今後更にコントの可能性を高めてくれることを期待したい。

令和4年度（第73回）芸術選奨 贈賞理由一覧　　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	平塚　千穂子	「バリアフリー」という言葉をあえて使わず、全ての人のための映画館「ユニバーサルシアター」と銘打った「CINEMA Chupki TABATA」を平成28年に立ち上げ、そして令和4年、映画「こころの通訳者たち」を制作。そこでは、舞台手話通訳者、音声ガイド制作者、そして障害を持つ当事者らの奮闘が描かれる。その根底にあるのは、障害の有無に関係なく一緒に芸術を楽しむという姿勢である。地域へも波及するその活動が更に発展されることを期待し、文部科学大臣新人賞を贈る。
評論等	佐藤　未央子	谷崎と映画の関係をめぐる研究はこれまでにも多数あったが、本書はそれら先行研究をしっかり踏まえた上で資料を丁寧に精査しつつ、谷崎にとって映画とは何だったのかという根本的な問いを掘り下げ、実にスリリングな考察となっている。何より、谷崎の文章に立ち返りたい思いを読者に掻（か）き立てる巧みな筆致が秀逸である。谷崎の「視座」に立たんとする筆者の目論見（もくろみ）には才知が溢（あふ）れ、分析力のみならず批評眼も鋭い。更なる成果が続くことを予感させる。
メディア芸術	野田　サトル	野田サトル氏の「ゴールデンカムイ」は令和４年大好評の末８年に及ぶ連載を完結した。この作品は明治末期の北海道と樺太を舞台に、国・民族・個人・様々なレイヤーが複雑に重なる、スケールとスピードを兼ね備えた稀（け）有な作品であった。特に敵味方が入り乱れる多彩なキャラクターと物語の要所に散りばめられる異文化の描写は多くの読者を魅了した。今後とも様々な歴史からの新たな物語の生成を期待して文部科学大臣新人賞としたい。

令和4年度（第73回）芸術選奨
選考経過

令和4年度（第73回）芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	演劇部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として10名、文部科学大臣新人賞候補者として19名の推薦があった。第一次選考審査会では、文部科学大臣賞に古典から現代まで5名、文部科学大臣新人賞に同じく4名の候補を絞り込んだ。 第二次選考審査会では、各選考審査員が推薦理由と共に、他の候補者への意見を述べる形で、様々な角度から議論を重ねた。候補者の業績の積み重ね、令和4年の成果、年齢等を吟味した結果、文部科学大臣賞には、「セールスマンの死」ほかの成果で自在な演技が高く評価された段田安則氏と、「義経千本桜」の3役をはじめとする成果で、時代物、世話物、舞踊それぞれに進境を示した尾上菊之助氏を選出した。 文部科学大臣新人賞には、主役に限らず、脇役としての卓抜した技量も高く評価して、「あつい胸さわぎ」ほかの成果によって枝元萌氏を選出した。
映画	選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として15名、文部科学大臣新人賞候補者として11名が推薦された。選考審査員は文部科学大臣賞候補者7名、文部科学大臣新人賞候補者5名を最終候補として、再度検討して第二次選考審査会に臨んだ。 文部科学大臣賞は監督・俳優・スタッフそれぞれの部門の候補者について検討を重ねた。その結果、「キングダム2　遥かなる大地へ」で素材から探し求めて役柄にふさわしい衣装を作り上げる作業の緻密さと、大作を支える力量への評価から宮本まさ江氏を推す声が強まった。続いて「シン・ウルトラマン」ほかに見る突出した視覚効果の表現で今日の日本映画を支える尾上克郎氏を推す声が勝り、スタッフ2名が選出された。選考審査員はスタッフ部門から2名選出されることは芸術選奨の対象の幅広さを示し、映画界の発展に繋（つな）がる好ましい結果と判断した。文部科学大臣新人賞は意見が割れて議論を繰り返した結果、劇場用映画の実績としては一本目だが、作品実現に至るまでの年月に積み重ねた真摯な創作姿勢が評価出来るとした上で、今後の活動を支援したいという意見が賛同を集め、早川千絵氏を選出した。
音楽	令和4年度は、コロナ禍による公演制限が多少緩和されたこともあり、昨年に比べると多くの公演が開催され、久しぶりの聴衆を前にした演奏に音楽家たちも熱のこもった演唱を繰り広げた。選考審査員及び推薦委員からは、文部科学大臣賞候補として14名、また文部科学大臣新人賞候補として10名の推薦があった。第一次選考審査会においては、各委員から提出された推薦理由を精査、検討するとともに、忌憚（たん）のない活発な議論がなされた結果、文部科学大臣賞では5名が、文部科学大臣新人賞では4名が第二次選考審査会の議論に委ねられることになった。第二次選考審査会でも、審査会間に重ねられた調査や精査に基づく各選考審査員の踏み込んだ意見表明は非常に活発で、伯仲した議論が交わされた。特に文部科学大臣新人賞では、年齢のことも含め、新人というものの概念についても様々な見解が表明され、慎重に検討が重ねられた。その結果、メシアン没後30年を期して催された「メシアン・プロジェクト2022」に示された、世界有数といっても良い説得力豊かな圧倒的成果により、メシアンをライフワークとするピアニストの児玉桃氏と、「山登松和の会」ほかにおける、山田流ならではの力強く華やかな箏（こと）の演奏や、深い味わいに満ちた安定感のある表現力が高く評価された山田流箏（そう）曲演奏家の山登松和氏の2名が文部科学大臣賞に選ばれた。また我が国でこれまで人材の乏しかったロッシーニ演奏などに新生面を開いている指揮者の園田隆一郎氏が文部科学大臣新人賞に選ばれた。
舞踊	舞踊部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として16名、文部科学大臣新人賞候補者として15名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名に候補者を絞り込んだ。ただし、文部科学大臣新人賞5名の内、2名は文部科学大臣賞としても推薦があった候補者であった。文部科学大臣賞の内訳は、琉（りゅう）球舞踊家1名、バレエダンサー2名、日本舞踊家1名。文部科学大臣新人賞は、バレエダンサー3名、舞踏家1名、日本舞踊家1名であった。 第二次選考審査会では、まず文部科学大臣賞の候補者4名につき比較検討、慎重に審議した結果、琉（りゅう）球舞踊家の志田真木氏ならびにバレエダンサーの福岡雄大氏の2名を選出することになった。志田氏、福岡氏ともに、洗練された古典舞踊での高い境地とともに、創作面での意欲的な成果が評価されたものであった。 文部科学大臣新人賞でも、当初選考審査員の評価は複数の候補者に割れたが、議論を尽くした結果、「舞踏 天狗藝術論」の成果が評価された舞踏家の田村一行氏が選出されることになった。

令和4年度（第73回）芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
文学	文学部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として12名、文部科学大臣新人賞候補者として11名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は6名、文部科学大臣新人賞は3名に候補者が絞られた。 第二次選考審査会で討議の結果、ほぼ全員の賛同を得て、次の受賞者が決まった。 文部科学大臣賞には、滝口悠生氏、渡辺松男氏が選ばれた。滝口氏の「水平線」は、かつての激戦地・硫黄島に生きた人々と、その孫たちとの時空を超えた交流を描く。人称・視点が自在に転換する技法も高く評価された。 渡辺氏の歌集「牧野植物園」は、奇想ともいえる独自の身体感覚と、人間中心主義を疑う深い思索とが、スケールの大きな自然の表現を生み出したところに、注目が集まった。 文部科学大臣新人賞には、九段理江氏の「Schoolgirl」が選ばれた。理解し得ない母娘の関係に、太宰治「女生徒」が新しい時間をもたらすという斬新な発想の意欲作である。
美術	美術部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者19名と文部科学大臣新人賞候補者18名が推薦された。第一次選考審査会では、選考審査員が推挙した作家の推薦理由を述べ、更に全ての候補者の作品や活動及び推薦理由に関して意見交換し、慎重に審議した。その結果、文部科学大臣賞は7名、文部科学大臣新人賞は5名の候補者に絞り込んだ。 第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ作家の作品と業績について、積極的な意見交換と審議をした上で投票を行った。文部科学大臣賞は一回目の投票で3名に絞り、さらに、二回目の投票によって栗林隆氏と沢村澄子氏の2名が、また、文部科学大臣新人賞は一回の投票で中崎透氏が選出された。 大臣賞の栗林氏はドクメンタ フィフティーンでの「元気炉」が深い思考と調査、旺盛な行動力の結晶であること、沢村氏は「宮沢賢治−沢村澄子　現象的書展」での言葉と対峙する真摯な姿勢が、ともに高く評価された。新人賞の中崎氏は個展「中崎透　フィクション・トラベラー」ほか旺盛で多彩な活動の成果が高く評価された。
放送	放送部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補として10名、文部科学大臣新人賞候補として11名の推薦があった。第一次選考審査会では、候補者の活動に関して多角的な議論が交わされ、文部科学大臣賞候補5名、文部科学大臣新人賞候補5名に絞った。 第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ候補者の作品の再視聴や、その業績について確認するなどして臨んだ各選考審査員から、改めて候補者を推挙してもらった。その結果、文部科学大臣賞候補には3名の名が挙がり、選考審査員に意見表明を求めたところ、全ての選考審査員の意見が一致する形で、脚本家の藤本有紀氏を文部科学大臣賞に決定した。候補者は異なるジャンルで専門性を持った仕事に携わっており、同じ尺度では評価し難いことを十分に認識した上で、氏の最近の業績、特に「カムカムエヴリバディ」での仕事を高く評価する声が多数挙がった。文部科学大臣賞新人賞候補には4名の名が挙がり、選考審査員の意見を確認した結果、最も多くの選考審査員から名前が挙がり、かつ、最終的に全ての選考審査員が支持する形で、関西テレビ放送プロデューサーの佐野亜裕美氏を文部科学大臣新人賞に決定した。氏の放送局間の垣根を越えた活躍ぶりに、放送現場の将来の在り方や可能性を感ずるとの声も多く挙がるなど、プロデューサーとしてのセンスの良さを含め、高く評価された。
大衆芸能	大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者11名、文部科学大臣新人賞候補者16名の推薦があり、第一次選考審査会で文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名の候補者に絞り込んだ。 文部科学大臣賞は浪曲、音曲、ロック、歌謡曲など何らかの形で「音楽」に携わりながら世界観を極めてきた実力者が勢揃（ぞろ）い。それぞれの過去から近未来まで見据えた熱い議論が交わされた。結果、大病を克服し今また第二の円熟期を迎えている京山幸枝若氏を選出。持ち前の大衆性と技術によって上方浪曲の魅力を現代へと伝えるため孤軍奮闘する意欲的な活動が高く評価された。そしてもう一人、半世紀にわたりロック音楽家として、あるいはCMや映画、ゲームなどの音楽制作者として、幅広い分野で尖（せん）鋭的な活動を続け、シーンに多くの影響を与えてきた鈴木慶一氏も選ばれた。文部科学大臣新人賞は落語、講談、漫才、コントなど多彩な演芸ジャンルから推薦された候補者をめぐり議論。最終的に、何気ない日常風景をシニカルな視点に貫かれた脚本と卓抜した演技力で笑いへと昇華する三人組コントグループ、東京03が選出された。

令和4年度（第73回）芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
芸術振興	芸術振興部門は、文部科学大臣賞15名、文部科学大臣新人賞12名の候補者推薦があった。第一次選考審査会で文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名に絞られ、第二次選考審査会での討議となったわけだが、ここからが一苦労である。芸術振興部門は新しい領域や複数の部門にわたる活動を行っている者と要項で決められており、2名程度に絞られたとしても、その候補者を同じ土俵で比較検討することが難しいのである。そのような条件の中で、今回はプレイヤーやパフォーマー以外、つまり他部門では評価されにくいであろう方を選ぼうという考えは選考審査員で共有されていた。最終的に文部科学大臣賞は舞台芸術プロデューサーの唐津絵理氏に決定した。「愛知県芸術劇場×Dance Base Yokohama　パフォーミングアーツ・セレクション2022」の成果が理由であるが、その元となった「Dance Base Yokohama」の活動も高く評価したい。また、文部科学大臣新人賞は映画館代表の平塚千穂子氏を選出した。ドキュメンタリー映画「こころの通訳者」の制作と、その中で描かれる聴覚障害者のための舞台手話通訳、音声ガイド制作などの地道な活動を評価したものである。受賞した2名には今後の更なる活躍を期待している。
評論等	評論等部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として17名、文部科学大臣新人賞として16名が推薦された。第一次選考審査会では、推薦書類の内容を踏まえて慎重に審議をした結果、文部科学大臣賞については7名、文部科学大臣新人賞については3名の候補者を絞り込んだ。 第二次選考審査会では、各候補の著作をめぐって踏み込んだ議論を交わした結果、文部科学大臣賞については中野正昭氏と岡塚章子氏が選出された。中野氏の「ローシー・オペラと浅草オペラ」は大正期の翻訳オペラ受容について、観客層からの視点を新たに設定して多彩な対象を考察し、画期的な成果をもたらした。岡塚氏の「帝国の写真師　小川一眞」は明治期に写真師として文化財調査に協力し、写真雑誌の刊行など写真文化振興に貢献し、帝室技芸員にも任じられた小川の事跡を丁寧に跡付け、その全貌を明らかにした。文部科学大臣新人賞については、これまで多様に論じられてきた谷崎潤一郎と映画というテーマに正面から取り組み、独自の視点から鋭利な分析を加えた「谷崎潤一郎と映画の存在論」の佐藤未央子氏が選出された。
メディア芸術	メディア芸術部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補として11名、文部科学大臣新人賞候補として15名が推薦された。第一次選考審査会では、全ての候補者の推薦書類の内容を踏まえ、各専門分野の委員からの見解を十分に精査し、慎重に議論した結果、文部科学大臣賞は5名、文部科学大臣新人賞は8名に候補を絞り込んだ。 第二次選考審査会では作品の現代社会へ向けたメッセージ性や、表現方法など多様な側面から議論が行われた。また、メディア芸術部門では、アニメーション、マンガ、メディアアート等、専門性が異なる分野に文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞を各1名に絞らねばならないため、丁寧な議論が求められた。セカイ系の代表作家として位置付けられてきた新海誠氏だが、自身で原作から書き、ゼロからオリジナルのアニメーションをつくり続けてきたことも評価のポイントのひとつとなり、文部科学大臣賞に選出された。アイヌ民族を主人公に描き、難しいテーマに挑み「ゴールデンカムイ」を完結させた野田サトル氏が文部科学大臣新人賞に選出された。いずれの受賞者も文化的世界観のアップデートを作品によって行なった功績も大きいと考えられる。

芸 術 選 奨 実 施 要 項

昭和４５年　５月１３日
文　化　庁　長　官　裁　定
一部改正 平成１１年　５月１３日
一部改正 平成１３年　１月　６日
一部改正 平成１５年　４月　１日
一部改正 平成１６年　４月　１日
一部改正 平成１９年１２月２６日
一部改正 平成２４年　４月　１日
一部改正 令和　３年　５月１９日

１　趣　旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

２　部　門

（１）演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家、演出家、演技者、舞台美術家等）
（２）映画（劇映画・記録映画等の演出家、脚本家、撮影者、演技者等）
（３）音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家、指揮者、作曲家、演出家、舞台美術家等）
（４）舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家、演出振付家、舞台美術家等）
（５）文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家、翻訳家等）
（６）美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
（７）放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家、演出家、演技者等）
（８）大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショウ・ポピュラーミュージック等の作家、作曲家、演出家、演技者等）
（９）芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
(10) 評論等（芸術評論家、文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
(11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

３　賞の対象

（１）賞は、文部科学大臣賞状及び賞金とする。
（２）芸術選奨文部科学大臣賞は、特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので、各部門２名以内（ただし、放送部門、芸術振興部門、メディア芸術部門は１名以内）を原則とする。
（３）芸術選奨文部科学大臣新人賞は、新人の芸術家（個人）を対象とするもので、各部門１名以内を原則とする。
（４）過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については、原則として対象としない。

４　選考の時期及び選考の基準

（１）選考は、毎年、原則として１月中に行うものとし、選考の対象となる業績は、主として前年の１月から前年の１２月までの間にあげられたものとする。
（２）選考に際しては、これまでの業績に加え、将来性、年齢、他の受賞歴等も勘案して選出する。

５　選考方法

（１）各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い、受賞者を決定する。
（２）前項の審査のため、各部門ごとに選考審査会を設置する。
（３）各部門ごとに推薦委員を設け、選考審査会に候補者を推薦する（評論等部門を除く）。
（４）選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家、専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

芸 術 選 奨 実 施 細 則

平成１１年　５月１３日
文　化　庁　次　長　決　裁
一部改正 平成１３年　１月　６日
一部改正 平成１５年　４月　１日
一部改正 平成１６年　４月　１日
一部改正 平成１９年１２月２６日
一部改正 平成２４年　４月　１日

１　選考実績
実施要項４（２）の選考にあたっては、下記のことに留意する。
（１）日本芸術院会員、重要無形文化財（各個認定）保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
（２）物故者は対象としない。
（３）受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は７０歳未満、新人賞は５０歳未満とする。
（４）受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

２　選考方法
（１）選考にあたっては、各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし、評論等部門及び芸術振興部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができるものとする。
（２）芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次のような者をいう。
①新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者
②複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
③他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

３　実施要項３（３）に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。
（１）活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
（２）今後活躍が大いに期待されること。

令和4年度（第73回）芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】	
亀岡　典子	産経新聞大阪本社文化部編集委員
古城　十忍	劇作家、演出家、（公社）日本劇団協議会常務理事
小玉　祥子	毎日新聞社学芸部専門編集委員
児玉　信	藝能学会副会長、邦楽プロデューサー
児玉　竜一	早稲田大学教授
立花　恵子	演劇評論家
伊達　なつめ	演劇ジャーナリスト

【映画部門】	
荒木　啓子	ぴあフィルムフェスティバルディレクター
勝田　友巳	毎日新聞学芸部専門記者
黒澤　和子	衣裳デザイナー
関口　裕子	映画ジャーナリスト、編集者
富山　省吾	映画プロデューサー、日本映画大学理事長
根岸　吉太郎	映画監督
矢田部　吉彦	映画プロデューサー、前東京国際映画祭ディレクター

【音楽部門】	
岡田　暁生	京都大学人文科学研究所教授
小畑　恒夫	昭和音楽大学客員教授
齊藤　裕嗣	日本芸術文化振興会基金部プログラムディレクター、國學院大學兼任講師
谷垣内　和子	（公社）日本芸能実演家団体協議会実演芸術振興部企画室長
塚原　康子	東京藝術大学教授
中村　孝義	学校法人大阪音楽大学理事長、大阪音楽大学名誉教授
宮澤　淳一	青山学院大学教授

【舞踊部門】	
稲田　奈緒美	桜美林大学准教授、舞踊評論家
織田　紘二	元国立劇場理事
桜井　多佳子	舞踊評論家
新藤　弘子	舞踊評論家
古井戸　秀夫	東京大学名誉教授
宮辻　政夫	演劇評論家
望月　辰夫	日本芸術文化振興会前舞踊プログラムディレクター

【文学部門】	
阿部　公彦	東京大学大学院人文社会系研究科教授
荒川　洋治	現代詩作家
小島　ゆかり	歌人
島田　雅彦	小説家、法政大学教授
松家　仁之	小説家
若島　正	京都大学名誉教授

【美術部門】	
青木　淳	建築家
小澤　剛	美術作家、東京藝術大学教授
加藤　泰弘	東京学芸大学教授
鴻池　朋子	アーティスト
正村　美里	岐阜県美術館副館長兼学芸部長
関　直子	早稲田大学文学学術院教授
高橋　綾子	名古屋造形大学教授
土方　明司	川崎市岡本太郎美術館館長
山梨　絵美子	千葉市美術館館長

【放送部門】	
井上　由美子	脚本家
岡室　美奈子	早稲田大学教授、早稲田大学演劇博物館館長
音　好宏	上智大学文学部新聞学科教授
里見　繁	関西大学社会学部名誉教授
中町　綾子	日本大学芸術学部教授
西村　与志木	JCA西村オフィス代表
源　孝志	脚本家、演出家

【大衆芸能部門】	
大友　浩	演芸研究家、文筆家
川崎　浩	毎日新聞社客員編集委員
長井　好弘	演芸評論家
中村　真規	演芸評論家（勘亭流・寄席文字・江戸文字書家）
萩原　健太	音楽評論家
古川　綾子	大阪樟蔭女子大学（学芸学部国文学科）准教授
松尾　美矢子	演芸ライター

【芸術振興部門】	
小川　敦生	多摩美術大学芸術学科教授
小崎　哲哉	京都芸術大学大学院教授、ICA京都『REALKYOTO FORUM』編集長
小林　真理	東京大学教授
武田　和	（公財）川喜多記念映画文化財団代表理事
長木　誠司	東京大学教授
三輪　眞弘	情報科学芸術大学院大学図書館長
渡辺　弘	（公財）埼玉県芸術文化振興財団ゼネラルアドバイザー

【評論等部門】	
五十殿　利治	筑波大学名誉教授
片山　杜秀	慶應義塾大学法学部教授
河合　祥一郎	東京大学教授
中条　省平	学習院大学文学部教授
細川　周平	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長
前田　恭二	武蔵野美術大学教授
松浦　寿輝	小説家、詩人、東京大学名誉教授

【メディア芸術部門】	
宇川　直宏	現在美術家、DOMMUNE主宰
岡本　美津子	東京藝術大学副学長・大学院映像研究科教授
しりあがり　寿	漫画家
原　久子	大阪電気通信大学教授
ヤマダ　トモコ	マンガ研究者、明治大学米沢嘉博記念図書館特別嘱託
横田　正夫	日本大学文理学部心理学科特任教授
米光　一成	ゲーム作家

【部門内五十音順】

令和4年度（第73回）芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】

新井　浩介	日本児童・青少年演劇劇団協同組合理事
犬丸　治	演劇評論家
井上　桂	前・水戸芸術館ACM劇場芸術監督
小山内　伸	演劇評論家、専修大学教授
神澤　和明	演劇評論家、演出家、大阪芸術大学非常勤講師
七字　英輔	演劇評論家
祐成　秀樹	読売新聞東京本社編集委員
出口　逸平	大阪芸術大学教授
林　尚之	演劇ジャーナリスト
横山　太郎	立教大学教授

【映画部門】

阿部　久瑠美	鎌倉市川喜多映画記念館学芸員
石坂　健治	日本映画大学教授
宇田川　幸洋	映画評論家
大木　隆士	読売新聞東京本社文化部記者
上島　春彦	映画評論家
金原　由佳	映画ジャーナリスト
諏訪　敦彦	映画監督、東京藝術大学大学院教授
野村　正昭	映画評論家
浜田　毅	日本映画撮影監督協会理事長
藤岡　朝子	山形国際ドキュメンタリー映画祭理事

【音楽部門】

加納　マリ	日本音楽研究家
河野　典子	音楽評論家
國土　潤一	声楽家、合唱指揮者、音楽評論家
椎名　亮輔	同志社女子大学教授
高畠　整子	音楽プロデューサー
千葉　優子	宮城道雄記念館資料室室長
野川　美穂子	邦楽研究家
野平　一郎	東京藝術大学名誉教授　東京音楽大学教授
舩木　篤也	音楽評論家
横原　千史	音楽評論家、兵庫県立大学講師

【舞踊部門】

藍本　結井	日本舞踊評論家
阿部　さとみ	舞踊評論家
飯塚　友子	産経新聞記者
海野　敏	東洋大学教授、舞踊評論家
岡見　さえ	共立女子大学准教授、舞踊評論家
菘　あつこ	舞踊ジャーナリスト
富田　大介	芸術文化観光専門職大学准教授（芸術文化専攻長）
平野　英俊	舞踊評論家
渡辺　真弓	舞踊評論家、共立女子大学非常勤講師

【文学部門】

阿部　賢一	東京大学准教授
安藤　礼二	多摩美術大学図書館長・芸術学科教授
石原　千秋	早稲田大学教授
辛島　デイヴィッド	作家、翻訳家、早稲田大学文学学術院准教授
栗木　京子	歌人、現代歌人協会理事長
野崎　歓	放送大学教授
蜂飼　耳	詩人、立教大学文学部教授
正木　ゆう子	俳人
吉川　宏志	歌人
吉田　修一	作家

【美術部門】

青木　野枝	彫刻家
今井　陽子	国立工芸館主任研究員
柏木　智雄	横浜美術館副館長・主席学芸員
倉方　俊輔	大阪公立大学大学院工学研究科教授
佐藤　卓	グラフィックデザイナー
清水　穣	美術評論家、同志社大学教授
滝沢　恭司	町田市立国際版画美術館担当課長・学芸員
土橋　靖子	（公社）日本書芸院理事長、日展理事
服部　浩之	東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻准教授
保坂　健二朗	滋賀県立美術館館長（ディレクター）
丸山　直文	武蔵野美術大学特任教授、画家
皆川　明	デザイナー
宮永　愛子	美術作家
山口　洋三	福岡アジア美術館学芸課長

【放送部門】

安部　裕	日本大学芸術学部放送学科教授
磯山　晶	プロデューサー
伊藤　純	プロデューサー
岡田　惠和	脚本家
上滝　徹也	日本大学名誉教授
坂元　裕二	脚本家
桜井　聖子	有限会社さくら代表取締役、プロデューサー
鈴木　嘉一	放送評論家
吉川　邦夫	演出家
吉村　ゆう	シナリオライター、劇作家、演出家

【大衆芸能部門】

佐々木　透子	intoxicate編集長
佐藤　英輔	音楽評論家
田中　勝則	音楽評論家
布目　英一	横浜にぎわい座館長・チーフプロデューサー
濱田　元子	毎日新聞論説委員兼学芸部編集委員
日高　美恵	演芸ライター
前田　憲司	芸能史研究家
安田　謙一	著述業
油井　雅和	毎日新聞記者
渡邉　寧久	演芸評論家、エンタメライター

【芸術振興部門】

赤松　玉女	公立大学法人京都市立芸術大学理事長・学長
衛　紀生	可児市文化創造センターシニアアドバイザー、芸文振運営委員会副委員長
掛尾　良夫	田辺・弁慶映画祭プログラム・ディレクター、映画ジャーナリスト、プロデューサー
さやわか	批評家、漫画原作者
玉虫　美香子	公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京　企画部助成課長

【メディア芸術部門】

井上　明人	立命館大学映像学部講師
内田　まほろ	キュレーター、JR東日本文化創造財団 高輪ゲートウェイシティ(仮称)文化創造棟準備室長
工藤　健志	青森県立美術館美術企画課長
小林　桂子	日本工業大学先進工学部情報メディア工学科准教授
城　一裕	九州大学大学院芸術工学研究院准教授
須川　亜紀子	横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授
中川　大地	評論家、編集者
西原　麻里	名古屋短期大学現代教養学科准教授
三浦　知志	尚絅大学現代文化学部准教授
若見　ありさ	アニメーション作家、東京造形大学准教授

【部門内五十音順】

別紙

文化庁　参事官（芸術文化担当）付　文化創造係 宛
（E-mail： sensho21@mext.go.jp、TEL；03-6734-4776）

令和４年度（第 73 回）芸術選奨贈呈式・祝賀会　取材申込書

令和５年３月７日（火）１２：００必着

項目	記入事項
１ 代表者氏名	
２ 代表者ふりがな	
３ 所属先名	
４ 部署・番組名	
５ 参加人数	（名）
６ 種別	□ペン　□スチール　□ムービー
７ 受賞者への個別取材	□個別取材希望あり　□個別取材希望なし
８ 個別取材希望対象者名 （※「個別取材希望あり」の方のみ）	
９ ご連絡先（Tel）	

※本申込書に記載された個人情報は、本式典の参加者の把握及び緊急連絡先のみを目的として使用し、厳重に取扱うものとします。

※複数人申し込まれる場合は、代表者が人数分お申し込みください。

※受賞者の都合等により、個別取材をお受けできない場合もございますので、ご了承ください。